

村雨の軒端：『去来抄』と『源氏物語』

田村， 隆
九州大学専門研究員， 福岡教育大学非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/8906>

出版情報：語文研究. 100/101, pp.60-66, 2006-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

村雨の軒端

——『去来抄』と『源氏物語』——

田 村 隆

一

『去来抄』先師評に次のような一節がある。

兄弟の顔見る闇や時鳥 去来

去来曰く「この句は、五月二十八日夜、曾我兄弟の互に顔見合せける比、時鳥などもうち鳴きけんかすと、源氏の、村雨の軒端にたたずみ給ひしを、紫式部が思ひやりたる趣をかりて、一句を作す」。先師曰く「曾我殿原の事とはききながら、一句いまだいひおほせず。其角が評も同前なり」と、深川より評あり。許六曰く「この句は心余りて詞たらず」。去来曰く「心余りて詞たらずとい

はんは、はばかりあり。ただいひおほせざるなり」。又草曰く「今の作者はさかしくかけ廻りぬれば、是等は合点の内なるべし」と、共に笑ひけり。

(本文の引用は「日本古典文学全集」による)

ここで言う、「曾我兄弟の互に顔見合せける比」とは、『曾我物語』の討ち入り直前の緊迫した場面を指している。正保三年版の本文を掲げる。

五月雨の雲さみだれまもしらぬ夕ぐべに。いづくをそこともしらねども。そなたばかりをかへりみて。なみだとゞもにあゆみけり。こゝろのうちぞむざんなる。……十郎たいまつふりあげて。こなたへむき給へやときむね。あかぬか

ほばせみんといふ。五郎きつて。かたきにあひせつなの
ひまもあるまじければ。これこそさいごのげんさんのた
めなるべし。まことにすけなりを。あにとみたてまつら
んも。今ばかりと思ひければ。あにがほをつくぐと
まぼりけり。十郎も又おとゝをみんなもこれをかぎりと思
ひければ。たいまつさしあげつくぐ見。なみだぐみけ
り。たがひの心のうち。をしはかられてあはれなり。

(巻九)

十郎祐成と五郎時致の兄弟は、敵工藤祐経邸への出立を前
に、互いの顔を「つくぐとまほ」るのであった。しかし、
『去来抄』の一句に見える肝心の「時鳥」は物語には登場し
ない。去来はここに『源氏物語』の趣向を借りたのだと言つ
た。それが、「時鳥などもうち鳴きけんか」と、源氏の、村雨の
軒端にたたずみ給ひしを」という記述である。すなわち、源
氏が時鳥の鳴き声を聞いたであろうと紫式部が想像したよう
に、きつとこの場面でも時鳥が鳴いたに違いない、というの
である。

この箇所は、従来、花散里巻の一場面を指すものと解釈さ
れてきた。

『源氏物語』の「花散里」による。時鳥を詠んだ歌の応
酬がある。『曾我物語』には時鳥は出ないので、『源氏物
語』の時鳥を『曾我物語』に転用したことになる。

(日本古典文学全集)

『源氏物語』には、源氏が「五月雨の空、珍しう晴れた
る雲間」に、花散里を訪問される途次、中川の昔の女の
宿に車をとめて、惟光に案内を乞わせ、「をち返りえぞ
忍ばれぬ郭公ほの語らひし宿の垣根に」と詠み、女が
「郭公語らふ声はそれながらあなおぼつかかな五月雨の空」
と答える条などを思い合わせたものか。

(『校本芭蕉全集』補注)

『源氏物語』花散里巻で、光源氏が五月雨のころの晴間
に、三の君(花散里)を訪れる途中、中川に住む昔の女
の家の軒端に立ち寄つた折に、郭公が鳴いたので、郭公
に寄せて歌を贈答する場面をさす。

(新編日本古典文学全集)

その他、近時刊行された小室善弘『俳句入門』芭蕉に聴く
「去来抄」に学ぶ作句法(本阿弥書店、平成十二年)、品

川鈴子『去来抄』とともに「俳句と連句を知る」(ウエツブ、平成十六年)などでも、同じく花散里巻を挙げてゐる。これらの見解は、次に掲げる昭和十年刊の宇田久『去来抄新講(俳書堂)あたり」に端を発するものと思われる。

この「兄弟の」の句が『源氏物語』の中の如何なる趣を借りたかといふことを確かにすることは容易でないが、或は次の如き「花散る里」の趣を指すのかも知れぬと思ふ。……

ここでは「指すのかも知れぬと思ふ」と控え目に記されているが、それが継承されるうちに次第に通説化したものとおぼしい。

源氏物語のどの部分をさしてゐるのか未勘。村雨の黄昏、思ふ人をひそかに訪れる源氏の君の姿を漠然と言つてゐるのであらうか。

(岡本明『去来抄評釈』三省堂、昭和二十四年)

の如く未勘とするものも若干見受けられるものの、概ねにおいて、上述のように花散里巻を指すという解釈は諸注一致し

ているようである。

二

前節宇田稿の引用末尾の下略部分に紹介され、諸注も指摘する花散里巻の該当本文をここで引用しよう。テキストは『湖月抄』(延宝元年跋刊)による。

さみだれの空、めづらしうはれたる雲まに、わたり給ふ。
なにはかりの御よそひなくうちやつして、御前などもこ
とになくしのびたまへり。……ほどへにけるを、おほめ
かしくやとつつましけれど、すぎがてにやすらひ給ふ。
をりしもほととぎすなきてわたる。もよほしきこえがほ
なれば、御車おしかへさせ給ひて、例のこれみつをいれ
給ふ。

をちかへりえぞ忍ばれぬ時鳥ほのかたらひし宿のか
きねに

また、この帖において時鳥は次の一節にも現れるので掲げておく。

ほととぎす、ありつるかきねのにや、おなじこゑにうちなく。したひきにけるよとおぼさるる程もえんなりかし。「いかにしりてか」など、しのびやかにうちずし給ふ。

たち花のかをなつかしみほととぎすはなちる里をたつねてぞとふ

しかしながら、この花散里巻説には、いくつかの率直な疑問が思い浮かぶ。まず第一に、『曾我物語』では「村雨」の描写があるのに対し、花散里巻の場面では、「めづらしうはれたる雲間」とあつて、雨天ではないのである。その状況をはたして去来は「源氏の、村雨の軒端にたたずみ給ひしを」などと記すだろうか。二に、場所も「軒端」ではない。源氏は車に残ったままである。三に、ここでの贈答の相手はヒロイン花散里ではなく、あくまで途中に立ち寄った女性に過ぎない。物語上重要でないこの出来事を去来は「曾我物語」と対にして引き合わせるだろうか。「討ち入りと男女の歌の応答ではだいぶ様子がちがいますが、闇のなかで機を窺っているとき時鳥が鳴いて過ぎる、という状況に似たところがなくはありません」(前述「俳句入門 芭蕉に聴く」といった指摘もあるもの、やはり討ち入りという真剣な状況と不似合の感は否めず、それを承知の上で選り取りられるほどの印象

的な場面とは思えない。

このように、ここを典拠とするには不自然な点が多い。では、その他にふさわしい場面があるだろうか。

三

私は以下に掲げる蛩巻の場面をこの箇所 の典拠として考えたい。

こゑはせでみをのみこがす蛩こそいふよりまさる思ひなるらめ

などはかなくきこえなして、御身づからはひきいり給ひにければ、いとほるかにもてなし給ふうれはしさを、いみじくうらみきこえたまふ。すきずきしきやうなれば、ゐたまひもあかさで、のきの乗もくるしさに、ぬれぬれ夜ふかく出で給ひぬ。時鳥などかならずうちなきけんかし。

細 草子(地也。「五月雨に物おもひをれば時鳥、夜深くなきていつち行くらん」の心にて書けり。

玉鬘をめぐるやりとりが語られる。源氏の弟、蛩兵部卿宮

は玉鬘のよそよそしい様子に、夜明けを待たず、邸を後にするのであった。時鳥などもきつと鳴いたであろうよ、という草子地は、右『細流抄』が説くように「五月雨に……」の歌（『古今集』夏、紀友則）を引歌とする。ここで、「時鳥などもうち鳴きげんかし」という『去来抄』の表現が、この蜚巻本文とほぼ符合していることをまず第一に重視したい。因みに、この箇所を『源氏物語大成』校異篇によって確認すると、肖柏本以外の青表紙本系統諸本は『湖月抄』本と一致し、肖柏本と河内本系統の諸本には「など」がない。また、近世期に流布した各種の板本を紙焼き写真等によって一覧すると、『絵入源氏』（三種）や『首書源氏物語』（寛文十三年刊）をはじめ伝嵯峨本、無刊記整版本など主要な伝本は『湖月抄』同様、「などかならず」の本文を採り、「など」がないのはいずれも古活字版の九州大学文学部蔵本・久邇宮家旧蔵本・寛永中刊本（二種）の四本に留まる。去来は「など」を持つ本のうちのいずれかによって記憶していたのであろう。ただし、『去来抄』が「時鳥なども」とする箇所は諸本すべて「時鳥など」であり、「も」を持つテキストは全く見当たらない。同様に「かならず」を持たないテキストも全くない（ただし、九大本の「かならず」には墨筆で傍らに見消が存する）ので、その点では微妙な差異を残している。

また、季節（五月雨の頃の深更）と場所（軒端）も両者は合致するのである。「のきの霽もくるしさに」であるから、この夜は雨も降っていた。さらに、源氏と弟兵部卿宮といいわば「源氏兄弟」の場面であり、曾我兄弟と対でもある。これらの点において、少なくとも通説の花散里巻よりは、不似合いの中にも一定の類似が認められるように思われる。

ただし、一つ不自然な点がある。この蜚巻で軒端に佇むのは源氏でなく、弟の蛭兵部卿宮なのである。とすれば、「源氏の、村雨の軒端にたたずみ給ひしを」としてはつきり「源氏」とあるのをどう説明すればよいのか。あるいはこの点によって、これまで典拠の可能性が排除されてきたのかもしれない。

単純な人物の取り違えと考えることもできようが、ここで一つの推定も成り立つ。この箇所を大東急記念文庫所蔵の去来自筆稿本に就いて確認すると、本文の上部に「光君の村雨の軒端にたゞすひ給ひしを」と挿入があつて、「光君」を墨線で消して「源氏」に書き改めている（図版）。そして興味深いことに、去来が他に文中で「源氏」と記す時、それは作品としての『源氏物語』を指すのである。



(「去来抄覆製 附解説並釈文」による)

例えば、『校本芭蕉全集』によつて「源氏」関連の語を検する。

たとへば 『源氏』 『栄花物語』 等のためしだいし候間、……

(浪化宛去来書簡)

『さるみの集』に、『源氏』を下心にふくみたる句(御)
さ候よし、……
(浪化宛去来書簡)

『源氏』などの事下心にふくみ被し遊候事、……

(浪化宛去来書簡)

此も『源氏』の内よりおもひよられ候。……

(浪化宛去来書簡)

『源氏』若菜巻に、「友まつ雪の……

(宇陀の法師)

紅葉賀に、源氏、源内侍が方へ忍び玉ふ時、……

(宇陀の法師)

「うつば」竹取『源氏』『狭衣』の類、皆々連哥の文法也。……

(宇陀の法師)

源氏のまぎく心に心をとめねばさも有べし。……

(葛の松原)

光る君(天理本「光君」)も五月雨のつれづく侘給ふ事、……

(十八番発句合)

ひかる。お源の物語にも。小野に鹿のけしきを。……

(貝おほひ)

といった例が得られ、去来書簡四例はいずれも作品としての『源氏物語』を示している。

だとすれば、去来はここを一旦源氏の所作としたものの、後で蛭兵部卿宮のそれと気づき、書名としての『源氏物語』の意味で「源氏」と改めるという操作を施したのではなかったか。仮に改変後の「源氏」を『源氏物語』と解したとしても、文章として整わず、問題が解消されたとは言いがたいけれども、少なくともこの訂正には人物として「光源氏」とはっきり指し示す意味合いを薄める意図があったのではなからうか。そもそも去来自筆稿本から明らかになように、本来この部分分は余白に書き込まれた挿入句なのであって、あくまで「うち鳴きけんかし」の表現を重くみるべきであろう。誰かと特定することはこの際取り立てて問題にされなかったのではないか。そう考える時、宇田氏前掲書等が底本とした板本「去来抄」（安永四年刊）に、本文に組み込まれた形で「むかし光源氏の……」（傍点筆者）とある事は、それが蛭兵部卿宮の所作を指す可能性を遠ざけ、間接的にであれ、花散里巻説を擁護していたことになる。

以上の考察から、私見によれば、去来は句作り際に際し、この蛭巻の場面を念頭においたものと考えられる。先に見たように、「全集」の頭注は、『源氏物語』に現れる時鳥を、時鳥

の現れない『曾我物語』に転用したと説くが、去来の説明を丁寧に読めば、ここはむしろどちらにも時鳥が現れないことに意味があるのではないか。「思ひやる」については『増補下学集』（寛文九年刊）、『書言字考節用集』（享保二年刊）などに「想像」という字が充てられるように、『曾我物語』には鳴いたとの明示がない時鳥が、きつと「うち鳴きけんかし」と「思ひやる」の構造なのである。一句の解は「ちよとど源氏物語」の同じ村雨の場面で紫式部が、「うち鳴きけんかし」という言葉で想像したように、きつとこの時も、緊張の中をまるで討ち入りの合図であるかのように時鳥が一声鋭く鳴いたのではあるまいか、と私も想像する」といった文脈でなければならぬ。それでこそ「思ひやりたる趣」云々の説明が初めて生きてくるのであって、それが去来が一句に込めた面白さでもあるように思われるのである。

（たむら たかし・本学専門研究員、福岡教育大学非常勤講師）